

霜月

(しもつき) 令和4年11月

秋も過ぎ去り、冷え込みもきびしくなって、霜が降りるという意味があります。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

朝よひに物喰ふごとに豊宇気の

神のめぐみを思へ世の人

本居宣長・玉鉾百首

今月のことば

朝よひに物喰うごとに豊宇気の

神のめぐみを思へ世の人

本居宣長・玉鉾百首

日本全国の神社のうちで、稻荷神社が約三分の一で、その最首に位する。それ程、イナリの信仰は一般に普及し、且つ一般の生活に直結するものとして、広く信仰されていく。「豊受の神」とは「立派な食物の守護神」の意味で、伊勢の神宮の外宮には「豊受大御神」を祀り、伏見の稻荷神社では「宇迦之御魂神」(食物をたらしめている根元の魂)を奉祀している。そのいづれにしても農耕時代には、五穀豊穡の祈りに応える神であり、商工業の時代から今日の労働時代に於いても、物を食はねば生きられぬ現実の即しても、「食べ物の守護神」・「食物を食物足らしめている魂の神」のご加護がなければ、生命をつないでいけぬ。その意味でいつの世になっても、朝晩人々は食事をする度ごとに、この「豊受の神」のおかげによるものであることを銘記すべきであったとした、この歌は、くりかえしつつ顧みられてよい。

(続神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋)

季節のまつり

鞆祭

十一月八日

火を扱う人々の祭り
「ふいご祭り」

鍛冶職、鋳物師などを始め、火を用いる職業の人々が行う祭りです。たたら祭り、金山講ともよんでいます。ふいご祭りの名は、火を起こす道具の鞆から出たもので、この日は仕事を休んで注連縄を張り、赤飯や餅を供えて金山毘古神・金山毘売神等を祀ります。江戸年中行事の記録には「十一月八日のいなり、ふいご祭りに、鍛冶屋でみかんを投げる」とあり、稲荷神社の火焚祭の行事と結びついて受け継がれています。

新嘗

十一月二十三日

新穀を供えて
収穫に感謝「新嘗祭」

新穀を神々に供え神恩に感謝する祭りです。宮中では天皇陛下が新穀を天神地祇に献って、御自らも召上りになります。

古くは日が定まっておらず、十一月の第二の卯の日を撰んで祭が行われましたが、明治六年の新暦採用の年の第二の卯の日がちょうど十一月二十三日だったことから、以後は十一月二十三日に行われることになりました。

「酉の市」
熊手が売られるようになった理由

毎年十一月の酉の日、全国各地の大鳥神社・鶯神社等で行われるお祭りで、初酉を一の酉といつて一番重視し、順に二の酉、三の酉といい、三の酉がある年は火事が多いという言い伝えがあります。これはひと月に三回も祭りが立つということ、日常生活がゆるまないよう、気を引き締める意味合いがあったと思われる。

鶯神社はもともと武運長久の神として、武士の信仰を集めていましたが、江戸時代になって祭礼の市で農機具を並べたところ、「福をかき集める」「金銀をかき集める」縁起物として、とくに熊手が人気品となりました。

さらに、お多福面、入船などの縁起物や、黄金餅という粟餅、ゆでたヤツガシラ(サトイモの一種で、「八人の頭になれる」という縁起物)なども酉の市で売られるようになり、武運長久の神としてより、商売繁盛や開運の神として、広く信仰されるようになっていきました。

しんしんいちによ
心身一如

身も心も一体であること。
平等で差別のないこと。

コスモス



参考文献
『日本人のしきたり』飯倉晴武(青春出版社)

令和 4 年
2022年

11月

日	月	火	水	木	金	土
		1 大安 一粒万倍日 三りんぼう うま	2 赤口 ひつじ	3 先勝 ●文化の日 明治祭 さる	4 友引 一粒万倍日 とり	5 先負 いぬ
6 仏滅 る	7 大安 立冬	8 赤口 ふいご祭 うし	9 先勝 とら	10 友引 う	11 先負 たつ	12 仏滅 み
13 大安 うま	14 赤口 ひつじ	15 先勝 七五三 さる	16 友引 一粒万倍日 とり	17 先負 一粒万倍日 いぬ	18 仏滅 三りんぼう る	19 大安 ね
20 赤口 うし	21 先勝 とら	22 友引 小雪 う	23 先負 ●勤労感謝の日 新嘗祭 たつ	24 大安 み	25 赤口 うま	26 先勝 ひつじ
27 友引 さる	28 先負 一粒万倍日 とり	29 仏滅 一粒万倍日 いぬ	30 大安 三りんぼう る			

二十四節気

【立冬 りつとう】… 七日

旧暦十月亥の月の正節で、これから冬に入る初めの節で、このころは陽の光も一段と弱く、日脚も目立って短くなり、冬の気配がうかがえるようになります。

【小雪 しょうせつ】… 二十二日

旧暦十月亥の月の中気で、まだ市街には本格的な降雪はないものの、遠い山嶺の頂には白銀の雪が眺められ、冬の到来を目前に感じさせられます。

六曜・選日

〔先勝〕… 諸事急ぐことによし、午後よりわるし
 〔友引〕… 朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
 〔先負〕… 諸事静かなることによし、午後大吉
 〔仏滅〕… 万事凶、思えば長びくおそれあり
 〔大安〕… 何事をするのにも吉の日、大吉
 〔赤口〕… 諸事油断すべからず、正午のみ吉
 〔選日〕… 諸事吉

〔三隣亡〕… 普請始め、棟上大吉日
 〔一粒万倍日〕… 出資・投資・購入、新規事業開始
 〔三りんぼう〕… 三隣亡、普請始め、棟上大吉日
 〔三隣亡〕… 普請始め、棟上大吉日
 〔一粒万倍日〕… 出資・投資・購入、新規事業開始
 〔三りんぼう〕… 三隣亡、普請始め、棟上大吉日

七十二候《11月》

小雪

初候・虹蔵不見（にじかくれてみえず）
 陽の光も弱まり、虹を見かけなくなる
 次候・朔風弘業（きたかぜこのはをひろく）
 冷たい北風が、木々の枯れ葉を落とす
 末候・橋始黄（たちはなはじめてきはせ）
 橋の実が黄色く色づく

立冬

初候・山茶始開（てはきはじめてひらく）
 さざんかが咲き始める
 次候・地始凍（ちはじめてこおる）
 大地が凍り始める
 末候・金盞香（きんせんかきく）
 水仙の花が咲き始める

「ハレ」と「ケ」

「ふだんの日と特別な日を使い分ける」昔から日本人は、ふだんどおりに日常を送る日を、「ケ（藝）の日」と呼びました。これに対して神社の祭祀や正月や節供、お盆などの年中行事、冠婚祭を行う日を「ハレ（晴れ）」の日として単調になりがちな生活に変化とケジメをつけていました。

「ハレ」のときは、日常から抜け出して特別な日を過ごします。ハレの日用の着物を着たり、神聖な食べ物である赤飯や餅を食べたり、お酒を飲んで祝ったりして、特別な日であることを示しました。一方、「ケ」はふだんどおりの日を送る日ですが、「ケ」の生活が順調にいかなくなることを「気枯れ」、つまり「ケガレ」になるとし、とくに死や病、出産などはケガレと考えてきました。

日本では神話期からケガレを忌み嫌い、神様に近づくのにはさわしい体になるために禊（みそぎ）をし、お祓（はら）いをしたりしました。そして、このケガレを取り除いた状態が「ハレ」だったので。今では「ハレ」「ケ」という考え方は一般的ではなくなくなりましたが、ハレの日に着るといふ意味では、「晴れ着」や「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉が残っています。

安産祈願 11月の戌の日
5日(土)・17日(木)
29日(火)

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕しております。神社にお問い合わせください。

《3日 文化の日》

自由と平和を愛し、文化をすすめる日です。

《23日 勤労感謝の日》

勤労をたっとうび、生産を祝い、国民たがいに感謝しあう日です。

祝祭日には国旗を掲げましょう